

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	管23K07	氏名	上田 飛鳥
研究主題 —副主題—	小学校音楽科における学力と授業過程の在り方 —イメージを通した音楽の基礎・基本—		
所属校	八王子市立第五小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>1 「音楽科の学力」の必要性</p> <p>音楽科の現状と課題</p> <p>本研究は音楽科において学力を明らかにし、学力向上を効果的に育成するモデルを形成することである。</p> <p>これまでの音楽科の授業では、子供たちの思いを重視し、楽しさや面白さを優先する授業が多く見受けられた。また、教師による楽曲完成が目的となっている授業も存在した。このことは音楽における情意面と技能面のバランスを欠く結果となり、子供が音楽を表現する深まりを真に感じる事が出来ず、結果、感動の薄い授業が行われていたのではないかと。</p> <p>「音楽科における確かな学力」も、知識や理解、技能を習得することであるといえる。それは、音楽活動に対する関心・意欲・態度を基盤としている。表現活動において「表現の工夫」を考えたり、鑑賞活動において「音楽を形づくっている要素」を知覚し、そこからよさや味わいなどを感じ取ったりした時に、音楽に関する用語や言葉等を用いて表現する力（＝音楽科における『考える力』）が育まれる。この育みこそが、「音楽科における確かな学力」の育成である。音楽科の目標に示されている「音楽を愛好する心情」、「音楽に対する感性」、「音楽活動の基礎的な能力」を常に相互的に作用しながら指導することにつながらなくてはならないのである。</p>
II 研究の方法	<p>(1) 文献研究及び意識調査</p> <p>先行研究から「音楽科における学力」を学習指導要領の変遷から明らかにした。</p> <p>(2) 学力モデルの構想</p> <p>「うた」を中心に据えた、情意面と技能面を効果的に育成する指導方法を作成し検証授業を行った。</p> <p>(3) 授業実践と分析</p> <p>「うたえる力」、「うたう力」のモデルを位置付けた「表現活動」と「鑑賞活動」の検証授業を行い、逐語記録・VTR・ワークシートから指導方法の有効性について分析した。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 文献研究及び意識調査</p> <p>(1) 学習指導要領音楽科の変遷</p> <p>戦後の学習指導要領の変遷から音楽科において身に着けるべき力は「音楽的基礎知識の習得、楽曲の完成、再現」から「豊かな感性、創造的な音楽、させる音楽からする音楽」と知識の習得と再生から思考力・判断力・表現力＝考える力の時代へと変容したことが言える。しかし、昭和43年学習指導要領における「基礎」領域が昭和52年学習指導要領において明記されなくなり、「豊かな感性」を重視するあまり音楽活動の根底となる基礎領域が軽視されることとなった。また、インタビューでの意識調査から音楽科における基礎の捉え方が教員間で不明瞭であることが明らかになった。</p> <p>(2) 音楽科の学力モデル</p> <p>音楽科として育てるべき学力は感性的側面と技能的側面が両輪として回らなくては音楽の表現活動は行えない。そこで、音楽の学力を効果的に育成する学力モデルを以下のように形成した。</p> <p>① 「うたえる」力・・・知識・技能面</p> <p>音楽は、感覚器官を用いることから、それらをコントロールされていなければならない。その点から音楽は「技術」の一種であることは明らかである。</p> <p>② 「うたう」力・・・感性・態度面</p> <p>技術面が優れているからといって、必ずしも感性や態度面も優れているとは限らない。従って「うたう」力である感性・態度を育てるとともに、「うたえる」力である技能面を育てることが重要である。</p> <p>2 実践授業</p> <p>(1) 「音の重なりを感じて」の実践から</p> <p>題材の「音の重なりを感じて」は3年生の器楽活動のまとめとして行われることが多い。リコーダー2重奏の活動に学力モデルを用いて、旋律の奏法を工夫すること。また導入として、コダーイ・システムの方法を活用することで自然に音符と楽譜を効果的に学習できる手法を実施した。</p> <p>(2) 「曲の雰囲気を感じて」の実践から</p> <p>本実践は「標題音楽」を教材とした鑑賞活動である。標題音楽は、表現の意図を理解しやすく、音楽外的なものを音楽でどのように表現しているのかを感じ取って、鑑賞することができ、創造的に鑑賞活動ができる。</p> <p>そこで、鑑賞の学習において、要素を客観的な理由としてあげながら、それらと標題に象徴される曲想とのかかわりを理解して聴き、活動をすることで、標題音楽のおもしろさを味わい、創造的に鑑賞する児童を育てていきたいと考えた。授業では、鑑賞活動における学力モデルの「うたう力」「うたえる力」とのかかわり、「共通事項」としての基礎的事項の学習を相互的な流れで進められた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究は音楽の学力を明らかにし、指導モデルを形成することで、「基礎・基本」と感性を効果的に育成する先駆的な研究であった。研究授業では単に器楽学習を行うのではなく、歌えなければ弾けないことから、サイレント・シンギングでの旋律聴取、ハンドサインによる階名唱での読譜力の習得、そしてそれらを感じたことからイメージする3つの活動を相乗的に行うことにより、</p>

視覚や聴覚などの感覚的知覚が活性化されていた。また、鑑賞活動においても鑑賞しながらメロディーをサイレント・シンギングすることが受容した鑑賞活動として音楽に対して感覚的知覚を精細に働かせ、イメージングを行える働きが見られた。

今後の課題は、本研究において導き出された学力モデルを基に演奏表現や鑑賞の授業を構想して研究実践を行い、さらに創作表現の活動においても仮説が有効であるかどうか検証していくことである。